広島国際学院高等学校
同窓会報

【第４号】
2003年6月1日発行
発行者
広島国際学院
高等学校同窓会
（旧広島電機大学附属高校）
広島県安芸郡海田町
蟹原２－８－１
TEL 082-823-3401
印刷／赤坂印刷株式会社
周南市馬神 854-1
TEL 0834-66-0001

歴代校長随想

持つべきは親友・・・

第六代校長　川田　基

昭和三十年最初の卒業生を送って以来三十三年間高校の教師として：その後電機大学の事務部長として九年間、希望に胸を膨らませている青春の真っ只中にある卒業生諸君と共に過ごせた日々の思い出は、月日を経るに従って幸せな人生であったと感謝している今日この頃です。

昭和二十年代は新生平和産業育成の基礎固め、そして三十年代は造船・自動車等に代表される重化学工業を中心とした産業立国、四十年代はオートメーション化による大量生産・消費時代と成長、五十年代はアメリカに次ぐ経済大国として胎動するも、六十年代後半「コンピューター」の発展により《I・T革命》と言われる情報化社会に突入しました。

その経済競争の中でソフトの面でアメリカに差をつけられ、さらに土地評価の面では金融界を激震：バブル崩壊現象と名付けられるように満身創痍のピンチの時代になってきました。好景気から不景気と正に激動の半世紀、後輩の卒業生諸君はこの厳しい経済社会の矢面に立って活躍している訳です。

人生を登山に例えてみましょう。低い山から目標を定めて登ることです。

早く登ろうと焦ってはいませんか？嵐や地震等の自然災害や疲労などによる病気・ストレスが行く手を遮っています。それに打ち勝つために手助けをしてくれる仲間が必要です。

苦しい時こそ家族・友人が癒してくれるのです。

辛いときには充分休養をとることによって身も心も快方に向かいます。それも仲間に支えられると倍加します。

昔から親友を三人持ちなさいと言われていますが、皆さんはクラスメイトや職場の仲間から親友と呼べる友達・先輩を一人でも見つけていますか。

一生の内で三人の親友を持てば鬼に金棒です。

友情を大切に育て自律協調の精神で一日一歩登って下さい。そして疲れたら休みなさい。きっと頂上に辿り着きます。それから第二の目標の山を捜せばよいのです。

三十年代最初に鉄筋建の校舎を誕生させた母校・海田町が五十年を経た今日、十数階の建物を筆頭に乱立している様子を卒業生諸君の健闘の成果とダブらせながら先輩としての心情を吐露し、更なる発展を節に祈願するものです。

（昭和二十五年卒）

同窓会の充実と発展を望む新布陣の幹事に期待！

同窓会会長　岡田民男

同窓会の皆様、学園並びに同窓会の名称が「広島国際学院高等学校」に変わって五年目を迎えました。

名称変更には数々の紆余曲折がありましたが、お陰様で名称が変わってから毎年本高校の受験生が増加し、ここ数年県下で一位～二位をキープしており、又それに伴い入学、卒業生も増加しております。

近年は少子化により十五歳人口が激減している昨今にあって誠に有り難い次第であります。

今春も四八六名の諸君が母校を卒業と同時に新たな同窓会々員としてご入会頂きました。

昭和二年（一九二七年）広島高等予備校として創立以来これまで卒業生は累計で二万九千八百九十名に達し、当地の高校としては最上位を占めております。

これらに備え、同窓会の目的であります『卒業生相互の親睦を計かる』ためには同窓会の活性化が何よりも大切であり、それらを達成するには何が必要であるかについて考える必要があり、各層における緊密なる連携を保つ上におきましても幹事さんの役割が非常に大きいものと考えます。

従いまして幹事さんには、実際に活動して頂ける方にお願いすることが一層重要であると認識し、役員会・幹事会での慎重審議を経て、旧幹事各位個々に諾否の了解のもとに一新し、この度強力な布陣となりました。

つきましては色々と諸事情もお有りかと存じますが、幹事の皆様にはどうか本同窓会の発展のため、一生懸命支えて頂きたく節にご尽力をお願い申し上げる次第です。

今後の課題について

かねてより「同窓会のシンボル」が欲しいとのご意見も多方面から伺っております。これらを含め活性化の具体策と合わせ時間を掛けて十分検討する必要があろうかと考えております。

会員各位の積極的なご提言をどしどしお寄せ下さいます様よろしくお願い申し上げます。

（昭和三十 年電気科卒）

西本学院理事長退任　後任は鶴素直氏

西本五郎
名誉学院長

電機学園長を二十六年、理事長を二十八年、附属高校の校長や大学の学長、また私立の大学・短大・高校などの各協会要職を永年勤められた西本五郎氏が本年三月夫々の職を退任されました。

これからも名誉学院長・理事として後人のご指導に当たられることになっています。

鶴 素直
新理事長

尚、後任の第六代理事長には現大学総長で副理事長の鶴素直氏が就任されました。

〃風光る…
新校歌誕生の経緯

校歌作詞者　荻野次夫

本校は創立以来何度かの校名変更が行われてきましたが、その基本になっていたのは常に『広島電機』であったと思います。

しかし、平成十一年の変更はそれまでの微調整的な校名変更とはまったく異なったものでした。

『広島電機』はどちらかと言えば男子校をイメージする校名でした。

平成元年に始まった男女共学化への努力が実を結び、今や広島地区ではれっきとした『共学校』の認定を受けるようにまでなりました。

新校名は西本五郎前理事長の発案と聞いていますが、新校名が生まれた背景の一つの要素として、男女共学があったと思われます。

校名変更に伴って問題になったのは校歌のことでした。

教職員の間では、永く歌い継がれた旧校歌を残そうという声もありましたが、やはり新校名にふさわしい新校歌を新たに創ろうということになりました。

旧校歌の歌詞はどうしても『男子校』のイメージでした。そのことが新校歌の誕生を必然的なものにしたのだと思います。

学園から校内職員に「我と思わんものは新校歌を作詞して提出しなさい」との呼び掛けがなされました。

その後、各々が提出した新校歌の歌詞が教職員に無記名で披露され、各自の意思でこれぞと思うものに投票をしました。

その投票の結果、新校歌の歌詞が決まり、エリザベート音楽大学の永井主憲先生に作曲をして頂いて、現在の校歌が晴れて誕生の運びとなりました。

新校歌作成に当って考えたこと！

歌詞の『風光る』は私がこの校歌の中で最も気に入ったフレーズで、わが校を包むこの地域全体の望ましい雰囲気をこの一言に込めました。

『瀬野川』は旧校歌の中にも出てくる川ですが、多くの卒業生・在校生にとって三年間の通学の中で切っても切れない思い出に満ちた場所であると思われ、校歌から外すことはできませんでした。

『愛の学舎（まなびや）』は校祖・鶴虎太郎先生の名言「教育は愛なり」を意識したフレーズです。

『瀬戸の海』は屋上、あるいは校舎の最上階からはるかに望める瀬戸の海・島々のことを歌い込みました。

しかし、年々高層建築物がその景色を見えなくしているのも事実です。

『未来・世界』は二十一世紀を生きる若者達に向けてのメッセージです。

『瀬野川』を下って行く水はやがて海田湾に注ぎ『瀬戸の海』からさらに『世界』の海へ飛び出して行くように、本校の生徒達が世界に羽ばたいて欲しいとの願いも込めてあります。

『平和』は広島に生まれた者にとって忘れてはならない大切な事柄として組み込みました。

総合的には、『風光る』好環境の中で若さみなぎる若者たち―ひとを大切にする若者達―真理（まこと）を探求する若者たち―平和を愛する若者たち―世界にはばたく若者たち―になって欲しいとの願いを込めてつくりました。が・・ちょっと欲張り過ぎましたか！？

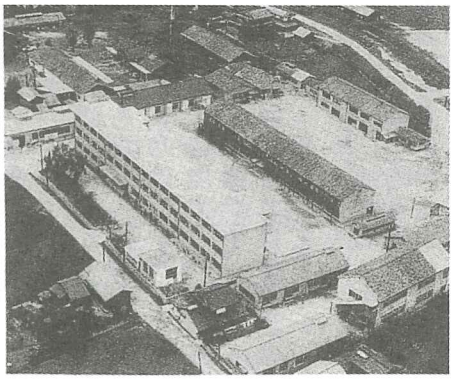
（国語科・教諭）

広島国際学院高等学校　校歌

作詞　萩野次夫
作曲　永井主憲

一、風光る
瀬野川の　せせらぎ清く（まなびや）
若さみなぎる　愛の学舎
熱き心は　未来を見つめ
真理（まこと）を探る　情熱（おもい）は一つ
わが学院は　ここにあり

二、潮香る
瀬戸の海　遥（はる）かに望み
絆深める　我らが仲間
燃える心は世界を見つめ
平和を誓う　願いは一つ
わが学院は　ここにあり


▶昭和36年校舎全景

学園短信

事務局　土居　茂

今年の本校入学生は四八六名で全在校生は一、二〇五名で新学期がスタートしました。

入学生は年々普通科志向が多くなっていますが、今年度より総合システム科の基礎工学コースを「情報コース」に改編しました。

その結果、総合システム科入学生は一五二名（内女子生徒四十名）となり、昨年の入学者数より約九十名増えました。

全生徒の男女の比率は女子が四十二パーセントになり、特に体育祭や文化祭では一段と華やかな雰囲気を感じます。

支部総会について

今年度次の各支部で総会が盛大に開催されました。

☆地域支部（坂支部・安浦支部・熊野支部・安佐支部）

☆職域支部（広島市消防局電消会）

☆学年支部（げんき会）

その他クラブＯＢ会が各地で開催され会長、副会長、事務局がオブザーバーとして参加いたしました。

＝事務局よりお願い＝

一昨年より同窓会総会の業務を当番幹事の方に手伝って頂いていますが、住所変更など配達不能で返却されています。

確実にお知らせする為に是非とも住所変更の場合は事務局へお知らせ下さい。

総会・懇親会には多くの会員の方々にご参加頂きますよう色々手を尽くしていますが、近所、同級生、先輩、後輩の同窓生に声を掛けて頂き、お誘い合せの上ご参加下さるようお願い致します。

ホームページのご案内

本校のホームページは左記の通りです。

yahoo japanにHPを掲載しています。

アドレスは：

www.hi.hkg.ac.jp です。

また、「広島国際学院高校」でも検索可能です。

西本理事長・岡田会長を迎えて
坂支部総会

シリーズ　ＯＢ先生
「電気工事班」と その後…

大林載孝

昭和三十年母校を卒業前に鶴猛校長先生から「２～３年学校へ残って勉強したらどうか：」と勧められたのが教師になるきっかけでした。

貧乏で大学へ行けない私にとって有難いお言葉で、そのお誘いに従い卒業の年にできた機械科の助手を二年足らず勤め、その後電気科の助手になった。

仕事は実習場の授業を手伝うほかに、セメントを練って学校の塀を作ったり、電灯のない校舎に電灯をつける手伝いなどの仕事が多かったが、好奇心の強い私はそれらの仕事が楽しく、毎日機械の油や天井裏の埃で真っ黒になっていた。

今思えばそんな仕事の一つ一つが私の骨と肉になっているのを感じる。

特に当時電気主任技術者であった永山先生から学んだ電気工事は、当時碍子引き工事しかなかった時代であるが、それは今も電気工事の基本中の基本であり、法規や電気工事を理解する上で大いに生きている。

その後大学の聴講生などを経て免許を取得し、教諭～大学の助手～講師を経て、平成十三年に四十六年間学園の勤務を終えました。

昭和三十七年頃に、高校の電気主任技術者を依頼されて電気工事士の資格も取ったが、授業よりも電気工事に関係する雑用の方が多くあり、もしかすると電気科の生徒達の実習にならないかと考え、電気工事を習いたい生徒を募集した。

これが思いがけなくも十人位の希望者がすぐに集まり、しかも成績の良い生徒ばかりであった。

当時は高校を卒業すると電気技術者を目指すのが普通で、電気工事は現場作業員的な意識が強く、まずいのではないかと思った。

「本当に電気工事をやりたいのか？」と念を押したが、全員がどうしてもやりたいと言った。

こうしてグループが発足したが、生徒会のクラブではないことから、誰が言うともなく「電気工事班」と呼ばれるようになった。

初めは基礎練習と電気工事士の資格取得のほかに校内の定期検査をしたり、電気不良部分を探しては手入れをしていた。

ある時、電灯のない教室に蛍光灯をつけてくれないかと学校から頼まれ、これは良い実習ができたと思い皆んなで頑張った。

その取り付け工事が完成すると、学校から感謝され喜んでいたのであるが、当時学校内には薄暗い裸電灯の教室や電灯の無いところまであったので、次から次へと仕事が出てきて毎日暗くなるまで生徒達と作業をした。

それでも生徒達は楽しそうで、段々と彼等の方から積極的な改善策が飛び出し、私が引っ張られるようになった。

こうしてどんどん学校が文字通り明るくなり片付いていった。

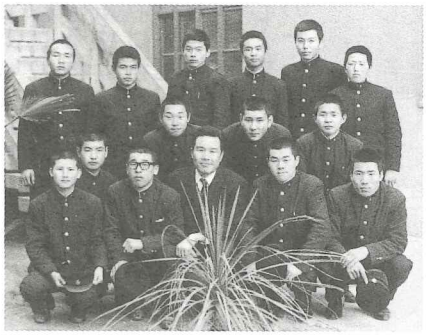
しかしちょうどその頃、校庭の中に大きな素晴らしい三階建ての校舎が建ち、その校舎を早く使用したいので電灯をつけて欲しいと頼まれた時はさすがの私も根気は尽きていた。

ここまでは実習の延長として頑張ってきたが、電灯の取り付けが急を要することは理解できるものの、生徒達も疲れているので断り続けたが結局「電気工事班」は協力することになり、意気消沈していた私と違い生徒達は毎日休まず暗くなるまで作業は続き、仕事の腕を上げるのを楽しみながら完成することができた。

私には何十年経っても彼等の名前と顔は忘れられない。

卒業して音沙汰の無いまま過ぎたある日『先生！電気工事班の皆んなが集まります。来て下さい』と言う便りが届いた。

胸をときめかしながら会場へ行く途中で遭った一人ひとりが懐かしく「誰だろう？」と呼び掛けながら会場に着いた。



電気工事班？の皆さん

集まっていた生徒達はそれぞれが立派な社会人になっており、想像以上の地位で活躍していたが、皆んなは「電気工事班」で苦楽を経験し仕事の好きな人間であることは変わらなかった。

発起人の挨拶では「卒業して二十五年、お世話になった大林先生に感謝の気持ちで一席設けた」と記念品まで頂き感激で胸が熱くなった。

〃教師冥利に尽きる〃と書くのはおこがましいが、我が母校は「電気工事班」の生徒に限らず、工業学校の生命である仕事の好きな人が多かったのは同じ同窓生として意を強くしている。

そしてこのような学び方があったことを脳裏に記憶し、素晴らしい生徒達を私の宝物としていつまでも持ち続けたいと思う昨今である。

（昭和三十年卒）

平成十四年度同窓会総会

懇親会「南一誠歌謡ショー」

副会長　友岡文夫

昨年度の同窓会総会並びに懇親会が六月八日（土）広島市の八丁堀シャンテで開催されました。

出席者は約百三十名で、午後六時より総会が行われました。

岡田会長の挨拶に引き続き、活動・決算報告、新年度の計画案が上程されそれぞれ承認されました。

その後場所を舞台付きの大広間に移して懇親会が行われました。

会場では来賓席・支部・クラブ・卒業年度別にテーブルが設けられ、再会を喜び合い握手を交わす光景も多く見られました。

又、ひと昔前までは余り見られなかった女性同窓会員の参加が年々増えてきており、懇親会が華やかになってきていますのが最近の傾向です。

総会万歳三唱

そして毎年数々の芸能人をゲストに迎え懇親会に華を添えてきましたが、昨年は我が学園の卒業生ではありませんが、広島を代表する有名歌手『南一誠歌謡ショー』を楽しみ、懇親会を大いに盛り上げました。

尚、本同窓会の総会並びに懇親会は、一昨年の総会で毎年六月の第二土曜日に開催することが決定されました。

その内容をお知らせしますと－

★日時＝毎年六月第二土曜日
　午後六時より総会・六時半より懇親会

★会場＝本同窓会々員が勤務しているホテル等を優先し持ち回りで決定する。

卒業生です頑張っています

町発展に全力投球中！

沖見町々長　松井　晃

私は昭和三十九年に、佐伯・大竹地区で駅伝有名校であった佐伯郡沖美町立三高中学校を卒業し、広島電機高校の陸上部に憧れて入学しました。しかし花形であった陸上部は部員が多く、いくら駅伝有名中学校とは言え小規模校出身の私は圧倒され、入部を断念した苦い体験があります。

学園生活では沢山の思い出があります。

担任の先生に感謝

特に思い出されるのが、一～二年生の担任だった大野充子先生（安佐南区在住）そして三年生の担任故・松田熊人先生のお二方です。

この両恩師との出逢いは、私の生涯を左右する大切なキッカケとなりました。

大野先生は当時本校では数少ない女性教諭で、男子生徒しかいないクラスを、持ち前のファイトと責任感で指導して下さりその統率力で五十七名の悪ガキ生徒全員を無事に三年生に進学させて下さったのです。

私も当時風紀委員をしており少しは先生の方針にお役に立ったのではと自負しております。先生には卒業後二～三度お目に掛かりましたが、在校時代の面影がそのままで我々の憧れの的でした。

又松田先生には、現在と同じような景気低迷が続き大変な就職難の時代でしたが、日夜頭を痛められながらご努力を頂き只々感謝の一言です。

特に私の場合は電電公社（現NTT）に進むようお話があり、その積りで就職を予定しておりました。

ところが地元沖美町役場が職員を募集しているので、転勤等がない職場が良いのではと家族に勧められて先生にご相談申し上げたところ「工業専門学校と職種が余りにも違うので難しいと思うが受けてみては：」とアドバイスを受け受験したのです。

その結果好運にも合格し沖美町役場に就職することができ、昭和四十一年四月より勤め始め現在に至っております。

役場に就職後は先生の仰った通り大変な日々で、見ること聞くことすべてが、それまで学校で学んだこととは別世界のことばかりでした。

特に当時の役場では現在と違い電卓も普及していない時代で「そろばん」ができなければ平常の仕事ができない状況で、やむなく半年間くらい小学生達といっしょに地元のそろばん熟に通った懐かしい思い出もあります。（そろばんは仕事に必要な四級まで一応上達したのでやめました）

そしてその「そろばん熟」で一緒に習っていた女性と二十六歳で結婚し、二人の男子に恵まれその子供達も成人し社会人として働いており、長男は何かのご縁が合ったのでしょうか母校のある海田町役場に勤務しております。

私は現在佐伯郡沖見町の町長として地域住民の付託に答えるため《潮風が安らぎを運ぶ故郷づくり》をキャッチフレーズに私心を捨て、全力投球で町政発展のため奮闘しているところです。

しかし、浅学のため諸先輩をはじめ各方面からのご指導やご高配がなければ当町政をはじめ全国的な地方自治体の難局混迷を乗り越えることはできないと思っております。

これまでにも益してご支援を心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、広島国際学院高校並びに同窓会の益々のご発展を心よりご祈念申し上げます。

（昭和四十一年電気科卒）

春季県高校野球大会兼中国大会県予選善戦

夏の甲子園を目指して・・

広島国際学院高校の中で吹奏楽部は全国レベルにあり、数々の賞に輝いて活躍していますが、体育系クラブでもインターハイの県・中国地区・全国大会へと素晴らしい成績を挙げ、本校のPRに貢献しています。

中でも硬式野球部は昨年のベスト４進出など甲子園を目指し活躍しています。

本年の春季リーグでは４回戦で惜敗しましたが、夏の大会の予選シード権も獲得し好成績が期待されます。

会員の皆さん！**夏の甲子園**も夢ではありません、物心共に絶大なる応援をお願いします。

春季県高校野球大会兼中国大会県予選結果

〈１回戦〉
4/19　世羅３×８国際学院
〈２回戦〉
4/26　熊野０×７国際学院
〈３回戦〉夏予選シード権
4/27　山陽２×３国際学院
〈４回戦〉
4/29　広陵５×２国際学院

支部だより

＝職域支部＝

『広島市消防局電消会』

会長　野村　忍

広島市消防局電消会は、広島国際学院高校同窓会唯一の職域支部として、昭和四十六年に母校広島国際学院（旧広島電機学園）の志を以って〝広島市消防行政発展のために寄与すると共に、同窓生会員相互の互助精神育成と親睦を図る〟ことを目的に、広島国際学院ＯＢの広島市消防吏員で設立され、今年で三十二年目を迎えました。

主な活動としては、毎年一回総会及び懇親会を開催しており、懇親会には毎回西本五郎名誉学院長・理事並びに岡田民男同窓会長、本部役員をご来賓にお迎えし盛大に開催しています。

しかし、現在三十七名の会員で活動していますが、会員の高齢化に伴う退職者の増加による会員数の減少という問題を抱えながら、継続的に本会を維持できることを念願しているところです。

今後は尚一層母校との連携を密にし、我が広島市の消防業務を就職先の選択肢の一つとして勧めて頂ければと願っています。

最後になりましたが、広島国際学院並びに同窓会の益々の発展と会員諸兄のご健勝を心よりご祈念申し上げます。

（昭和五十年普通科卒）

編集後記

本年四月既存の学年幹事へ事務局より封書が郵送されました。「貴方は今後も幹事（役員）を続けて頂けますか？」と言う内容でした。

結果的には返信ハガキが届いたのは極めて少ないものでした。

しかしながら〝同窓会の活性化は幹事さんの活動に掛かっています〟と岡田会長の本文記事にもありましたように、心強いボランティア精神で引き受けて下さった新しい幹事さん達の布陣でスタートした同窓会の発展を期待してやみません。

そして唯一〈同窓会の絆〉を保つ『同窓会報』に沢山の方々から原稿がどんどん集まり、編者が悲鳴を上げるよう節にご協力をお願いするばかりです。

会員の消息から思い出、誰かに伝えたい事、会の運営など何でも結構です。事務局又は幹事へどしどしお送り下さい。

会員諸兄！充実した同窓会報の次号をお楽しみに・・・

幹事長　杉原弘皓
（三十四年電気科卒）